平成２５年９月３０日

文部科学大臣
　下村　博文　様

大川小学校遺族

大川小学校事故検証委員会に対する意見書
なぜ校庭に居続けたのか，遺族が知りたいのはそれだけである。
５１分間の真実を明らかにしてほしい。

７８人の子どもが１１人の先生と一緒に学校にいたという，完全なる義務教育の学校管理下で，救える条件（時間・情報・方法）がありながら，子どもを１ｍも上に避難させず，大きな犠牲を出したのは全国で大川小学校だけです。１分で登れる山へ行こうとした子どもも止められました。けっしてあってはならないことです。５１分間校庭で何が起きたのか，私たちはそれを知りたいだけなのです。

第１回事故検証委員会から７ヶ月以上が経ちますが，これまでの同委員会の審議経過や中間報告書の内容を見ると，現場にいた人の証言は無視し，私たちが一番知りたい５１分間の真実にはまったくふれず，子どもたちが犠牲になったことが仕方なかったと結論づけたいかのような審理が行われています。

こうした検証委員会の対応は，信頼を大きく欠く状況で，遺族らに大きな失望を与えています。このままでは，今後，予定されている最終報告が事実を正しく把握した信頼に値する報告にならないものと危惧するため，下記の意見を具申させていただきます。

第１　意見の趣旨

なぜ，子どもたちが命を落とさなければならなかったのか，という核心について検証されていない。

第２　意見の理由

１　検証の手法，内容について

・現段階まで最も検証すべきこと（当日の避難行動について）が議論されていない。

・核心とはまったく関係ないことばかり検証している。

・津波の到達時刻等，表面的で間違った調査・考察に基づいて，中間とりまとめを作成している。

・震災直後の鮮明な記憶を元にした証言（録音・録画）等が検証にまったく生かされていない。

・震災を経験した子どもの聞き取りにあたって，心理状態に配慮し，話しやすい環境を整える努力をしていない。初期の段階における児童の聞き取り記録の破棄についての調査をしていない。

・他の学校も備えが不十分だった，地域の危機意識が低かった等，仕方がなかった要素ばかりを無理に上げている。学校の立地条件，勤務年数などは，恥ずかしくてとても言い訳にできない。学校管理下における子どもの命の大切さときんと向き合っていない。

・地区の被災状況を調べて，学校だけではなく地区で多くの方が亡くなったということを強調しているが，問題のすり替えである。

２　委員会の運営について

・見識，専門性が疑わしい委員がいる。選出の仕方も疑問。検証作業では心理学者の大橋智樹委員が津波の挙動を担当するなど,専門外のことを担当している。何のために専門家を集めたのか疑問。

・公正中立の名の下に重要な議論や証言が遺族及びメディアに伝えられていない。

・遺族に寄り添った検証を行うと言いながら，遺族からの要請にも関わらず，報告会に検証委員が参加せず，遺族からの質問・疑問に対して正面から答えない。間違いを指摘されても訂正しない。遺族の声に耳を傾けない不誠実な対応を続けている。

・このような状況で，新たな有識者にヒヤリングをしようとしている。

・突然，「諸般の事情により」委員会開催が延期になった。延期する以上，遺族らに真摯に延期事情を説明し，納得を得る努力を傾注すべきではないか。

2013年10月21日　第5回検証委員会（10月20日）を受けて事務局へ送ったメール

昨日はご苦労様でした。
事務局はほんとうに大変だろうと思います。
昨日の検証委員会について、気がついたことを述べます。

津波の到達時間は、つまり１５：３７頃ということですね。
ただ、記者会見等でも指摘されていたとおり、富士川の流れについて説明がありませんでした。釜谷に侵入した津波は北上川から、陸上の遡上、そして富士川と３種類あります。
北上川と富士川が釜谷までは、平行に流れていて、間垣からは流れが離れています。それに、橋や堤防の決壊の状況等をふまえると、やはり福地と飯野川の水位計での推測は無理があると思います。
いずれにしても子どもたちを襲った津波がほぼ時計の止まっている時間であるということですよね。

当日の様子の中に「山さ逃げよう」と子どもが言ったという事実が抜けています。
記者会見で聞かれると、そういう証言もあったが精査中とのこと。１１年４月の段階で明らかになっていて、６月の市教委の説明でも出てきている「山に」という子どもの声が記載されていないのは、不自然です。
「大川小にはＣＤラジカセが少なくとも一台はあったと思われる」は、やはり記載が必要でしょうか。

ゲームの話をしていた児童について、朝日新聞の記者からも指摘がありましたが、危機感のなさの表れと単純に考えてはいけないと思います。不安を紛らすためかもしれないし、家にあるゲームは大丈夫かと心配しているのかもしれません。
ただ、この点については詳しく調べる必要はないと思います。

地域のお年寄りが先頭に立ったというのは、おそらくＡ先生の証言だったと思いますが、Ａ先生は校舎から出てきて、列を最後尾から見たので、そう見えたかもしれませんが、
あの時お年寄りの人は交流会館に入っていったのです。それを後ろからは列の前にお年寄りがいたので、先導しているように思えたのでしょう。

地域の人が三角地帯に誘導したのであれば、行き止まりのあのルートを通るとは思えません。もう津波が迫ってきたので、パニックになり動き出したのだと考えるのが自然です。
ただ、私は、最初の段階で否定した「山」に意地でも行かないぞという意識が働いたのだとも考えています。

学校評議委員の運用は、美谷島委員がせっかく質問したのに、議論されませんでしたが、あれは明らかに管理職の怠慢です。校長の経営理念そのものです。杜撰な防災マニュアルにも通ずる事項です。
また、事前の備えが不備であった点の指摘がありましたが、マニュアルが杜撰な上にそのマニュアルを教職員も把握していなかったという点が抜けています。しっかり記載して下さい。

山に登れるかどうかは、何度も写真を示しましたが、あのように低学年がその年度に授業で登っています。
そして校長先生が撮ったあの写真は校内に掲示されていたとのこと。
あの時の校庭で、大津波警報を知らない人はいなかったし、山へ登れることを知らなかった人はいないのです。

地域住民のせいにするような事項はたくさん出てきましたが、
当時教員がどんな行動をとり、どんな話し合いをしたのかは示されていません。
バスのことが話題にならなかったようですが、避難について話を続けていれば、必ず話題に出るはず。命を救うためのまともな議論をしていなかった（途中でやめた）ということを裏付けています。いざという時に一体になれない組織のあり方こそが大きな教訓の１つだと私は思います。何かはしていたのだろうけど、最も大切な意思決定のための議論が尽くされていないのです。検証委員会もそうならないように願います。

事後対応についても、もっともっと深く議論が必要だと思います。
3 月 16 日の校長先生の「引き渡し中に津波、油断、校舎の屋根を越えて津波」という報告は 15 日にメールでＡ先生と連絡をとれて、それをふまえてのものではないのですか？
「引き渡し中に」などという言葉は、校庭にいた学校関係者しか言えない言葉です。

教育長の遺族宅訪問も、教育長本人からしか聞き取っていないのではないでしょうか。

担当者が途中で変わったり、Ａ先生の FAX の存在を隠していた点などは取り上げないのでしょうか。真実を明らかにする過程において大きな弊害になったのはあきらかですよね。

７０数名の小学生が１１人の先生と一緒に校庭にいて、大津波警報が発令されました。
さて、子どもは誰が守るべきでしょう？

津波到達まで５１分あります。誰でも登れる山がそばにあり、バスもあります。
子どもは７０数名、先生は１１人。子どもを救うのは不可能である。〇か✕か

昨日の検証委員会では答えは分かりません。

記者会見で、飯沼先生という方が、興奮して言ってました。「学校のすぐそばで」、多くの子どもが折り重なって死んでいたんだぞと。メチャクチャな質問でしたが、切実に響きました。
橋のたもとに、泥だらけの子どもたちが何十人も並べられていたのです。まだ、見つかっていない子どももいるのです。
そういう事故を検証しているのです。しかも２年数ヶ月経って検証しているのです。
それを忘れないでほしいです。

それから言葉の使い方で一点。委員長は「遺体捜索」という言葉をつかっていますが、「不明者の捜索」だと思います。

気付いた点がもっとあるので、近々またメールします。ご検討下さい。
昨日の取材でも言いましたが「私たちも真剣だが、検証委員の先生方も一生懸命やっている。真実が明らかになり、未来に生かせるのであれば、検証はだれが、どんな形でやってもいいんだ、気付いたことがあればどんどん言っていく、協力する」私のスタンスはずっと同じです。もっともっと委員の方々ともああだこうだと話し合いたいです。何度も言いますが、立場を越えて議論を尽くすことが大切なのです。その議論ができるかどうかが、問われているのです。慣例とか、前例をひっくり返しましょう。歴史的な検証にしましょう。